



結婚を読み解く

ブライダル論

—文化・社会・産業—



国奥 真奈美
著

建帛社
KENPAKUSHA



はじめに

結婚という営みは、人類の歴史とともに歩んできた最も普遍的な文化の1つである。二人の人間が結ばれ、新たな家族や共同体を築いていくこの営みは、時代や地域、宗教や社会制度によって様々な姿をとりながら、洋の東西を問わず脈々と受け継がれてきた。そして現代の日本において、その営みを支え、かたちづくる総合的な領域として発展してきたのが「ブライダル」である。

ブライダルは、長い歴史の中で育まれてきた婚礼文化や宗教儀礼、結婚や家族をめぐる社会制度の変容、そして現代における一大サービス産業としての広がりまでを含む、極めて重層的な概念である。すなわちブライダルとは、文化・社会・産業という3つの領域が交差する地点に立ち現れる、学際的なテーマなのである。

近年、日本社会では未婚化・晩婚化の進行、家族形態の多様化、価値観の個人化など、結婚をめぐる環境が大きく変化しており、ブライダル産業もまた、こうした社会の変化に応じてその在り方は変様してきている。ゆえに、ブライダルを学ぶ者には、目の前の儀式や商品の表層だけではなく、その背後にある歴史的厚みと社会的文脈を見通す力が求められている。

しかしながら、ブライダルを学ぼうとする学生にとって、文化・社会・産業の三領域を横断的かつ体系的に学べる書籍は、これまで決して十分とはいえなかった。婚礼の歴史や儀式作法を扱った文化論、家族社会学や結婚観の変化を論じた社会学的研究、ブライダル産業の経営やマーケティングを扱った実務書はそれぞれ数多く存在するものの、それらを1冊の中で有機的に結びつけ、ブライダルという営みの全体像を提示するテキストは、見当たらなかった。本書はこうした背景を踏まえ、これら三領域を包括的に学べる教材として刊行するに至ったものである。

本書を手取る読者には、幅広い視点でブライダルを多角的にとらえていただきたい。婚礼に込められた文化的意味を読み解く眼差し、結婚や家族をめぐる社会構造の変化を見つめる視座、そしてブライダル産業を支える経営的・実務的な視点——これらを段階的に学ぶことで、ブライダルという営みがもつ奥行きと豊かさが、はじめて立体的に浮かび上がってくるはずである。そしてその学びは、やがてブライダルにかかわる仕事に就く者にとっても、また自らの人生の節目に立つ一人の人間としても、確かな知的基盤となるに違いない。

最後に、本書の刊行にあたっては、企画段階から編集・校正・装丁に至るまで、建帛社の皆様より多大なるご尽力を賜った。とりわけ、本書の意義をご理解いただき、刊行の機会を与えてくださった編集部の方々には、心より深く感謝申し上げます。皆様の温かいご支援なくして、本書が世に出ることはなかった。

本書が、これからブライダルを学ぶ読者の皆さんにとって、知的探究の確かな出発点となることを心より願っている。

2026年8月

国奥真奈美





もくじ

序章 ブライダルとは何か

1 結婚の社会的意味	1
2 ブライダルの定義と語源	2
3 本書が扱う 3 つの領域	2
4 本書を貫く学びの視座	3

第 1 章 日本の結婚と家族関係

1 家族とは何かーその役割と機能	4
(1) 生産・労働機能 4 (2) 養育・教育機能 4 (3) 扶助機能 5	
(4) 再生産機能 5 (5) 精神的機能ー豊かな社会で重みを増す役割 5	
2 明治期の家制度ー「家」を基盤とした社会のしくみ	5
3 戦後の民法改正と家制度の解体	6
4 高度経済成長と核家族化ー「近代家族」の形成	8
5 女性の社会進出と結婚観の変化	10
(1) 1980 年代 10 (2) 1990 年代 13	
6 家族制度と結婚文化	14
7 まとめ	15

第 2 章 結婚の歴史と世界の結婚事情

1 結婚という制度を考える	17
2 日本の結婚の歴史	18
(1) 原始時代から奈良・平安時代の結婚 18 (2) 武家社会と嫁入婚 19	
(3) 江戸時代の結婚 20 (4) 明治期から戦前までの結婚 21	
(5) 近代の日本の結婚 23	
3 西洋の結婚の歴史	25
(1) 古代ギリシャの結婚 25 (2) 古代ローマの結婚 26	
4 世界の宗教と結婚	27
(1) 宗教と結婚のかかわり 27	
5 まとめ	29





第 3 章 婚礼文化と儀式

1	婚礼文化とは何か	31
	(1) 人生儀礼としての婚礼 31 (2) 婚礼儀式の社会的機能 32	
2	神前式の様相	33
	(1) 神前式の成立背景 33 (2) 神前式の特徴 33 (3) 式前準備と席次 34	
	(4) 神前式の儀礼の流れ 34 (5) 神前式の現代的意義 35	
3	キリスト教式の様相	35
	(1) キリスト教式の成立背景 35 (2) キリスト教式の特徴 36	
	(3) 式前準備と席次 36 (4) キリスト教式の儀礼の流れ 37	
	(5) キリスト教式の運営上の留意点 37 (6) キリスト教式の現代的意義 37	
4	人前式の様相	38
	(1) 人前式の成立背景 38 (2) 人前式の特徴 38 (3) 式前準備と席次 39	
	(4) 人前式の儀礼の流れ 39 (5) 人前式の運営上の留意点 39	
	(6) 人前式の現代的意義 40	
5	仏前式の様相	40
	(1) 仏前式の成立背景 40 (2) 仏前式の特徴 40 (3) 式前準備と席次 41	
	(4) 仏前式の儀礼の流れ 41 (5) 仏前式の運営上の留意点 41	
	(6) 仏前式の現代的意義 42	
6	まとめ	42

第 4 章 婚礼衣装の文化

1	婚礼衣装の起源	44
2	日本の婚礼衣装の歴史の変遷	45
	(1) 平安時代：貴族文化と「白」の神聖性の萌芽 45	
	(2) 室町時代：武家文化と白無垢の誕生 45	
	(3) 江戸時代：町人文化の台頭と色打掛の発展 46	
	(4) 明治時代：近代化と西洋文化の流入 47	
	(5) 戦中～現代：洋装化と多様化の時代 48	
3	花嫁の和装婚礼衣装の種類と文化的意味	49
	(1) 白無垢：清純と誓いの象徴 49 (2) 色打掛：婚礼の華やぎと吉祥の願い 50	
	(3) 黒引き振袖：町人文化が育てた華やぎ 51	
	(4) 新郎の和装：黒紋付羽織袴の格式 51	
4	洋装ウェディングドレスの歴史と文化	52
	(1) 古代から中世：色とりどりの花嫁衣裳 52	
	(2) ヴィクトリア女王と白の時代 52	
5	花嫁が顔を隠す文化：ベールと頭飾の意味	53
	(1) ベールの起源と意味 53 (2) 頭飾：綿帽子と角隠しの由来 54	
	(3) 通過儀礼としての「変身」 56	
6	婚礼衣装と社会・文化的意義の考察－衣装に映し出される社会制度	56
7	まとめ	57

第5章 ブライダルの慣習

1	婚礼慣習の文化的・社会的位置づけ	59
2	日本の婚礼慣習	59
	(1) 暦と六曜の考え方 59 (2) 見合い 60 (3) 三三九度 62	
	(4) ご祝儀 63 (5) 水引 63	
3	西洋の婚礼慣習	64
	(1) サムシングフォー 64 (2) ウェディングケーキの歴史 65	
	(3) ブーケとブーケトス 66 (4) ユニティキャンドル 67	
4	婚礼のプロトコル	67
	(1) 装いの注意 67 (2) 食事の注意 68 (3) 贈答・振る舞いの注意 68	
5	まとめ	68

第6章 現代日本の結婚・恋愛をめぐる現象

1	はじめに－「結婚」を現象としてとらえる	70
2	結婚の社会的な様相	70
	(1) 婚姻件数と初婚年齢の長期推移 70	
	(2) 平均初婚年齢の上昇と結婚時期の多様化 71 (3) 未婚化・非婚化 74	
3	結婚意思と実態のギャップ	75
	(1) 「しない」と「できない」－データでみる年代差 76	
4	恋愛観の変化	79
5	結婚への動機と利点の認識	81
6	まとめ	83

第7章 未婚化に対する論説変容

1	はじめに－未婚化をめぐる多様な説明枠組み	85
2	「経済要因論」雇用・所得不安説	86
3	「価値観変化論」個人化と親密性の変容	88
4	「ロマンティック・ラブ・イデオロギー論」	90
5	「女性の経済的自立と結婚市場の変容論」	91
	(1) 女性の自立仮説 92 (2) 結婚市場のミスマッチ仮説 92	
	(3) 「負の関係」の「世代逆転」 92	
6	「未婚化＝少子化直結論」	93
7	その他の論説	95
	(1) 「地域格差論」 95 (2) 「ケア負担論」 95 (3) 「制度論」 95	
8	まとめ－重層的因果としての未婚化	96





第 8 章 ブライダル産業の全体構造

1	ブライダル産業の概要と最新市場動向	98
2	ブライダル産業の定義と特徴	99
3	結婚式場業を中心としたブライダル市場の動向	100
4	婚姻件数の推移と将来予測	100
5	結婚式、披露宴の現状と価値観の多様化	101
6	新婚旅行市場	103
7	新生活商品市場（インテリア・家具、電化製品）	104
8	ブライダルジュエリー市場	105
9	結納・顔合わせ市場	105
10	結婚情報サービス・仲介業	106
11	まとめ	108

第 9 章 ブライダルマーケティング

1	はじめに－ブライダル産業が直面する構造的転換	110
2	ブライダル産業の市場動向と外部環境の変化	111
	（1）婚姻件数の長期的減少と市場縮小	111
	（2）市場の二極化と新たな需要構造	111
3	ブライダルマーケティングの定義と理論的背景	112
	（1）日本におけるマーケティング活動の変遷	112
	（2）ブライダルマーケティングの定義	113
	（3）サービスマーケティングの特性とブライダルへの適用	113
	（4）価値共創（co-creation of value）の概念	114
4	競争環境の変容－業態間競争とプラットフォームの台頭	115
	（1）ブライダル業態の多様化と価格戦略の課題	115
	（2）会場紹介型プロデュース企業の台頭とプラットフォーム	116
	（3）フォトウェディング市場の台頭	116
5	ブライダル商品の特性	117
	（1）人生儀礼性と高い感情価値	117
	（2）文化創造性と時代先行性	117
	（3）意思決定構造の特異性	117
	（4）体験商品としてのサービス特性と統合的理解	118
6	ブライダルマーケティングの戦略	118
	（1）体験価値設計戦略	118
	（2）関係性構築戦略	118
	（3）顧客接点戦略と戦略統合の視点	119
7	まとめ	119

第10章 ブライダル販売促進と新規市場

1	はじめに	121
2	販売促進の役割と基本概念	122
	(1) 販売促進とは何か 122 (2) ブライダル販売促進の3段階 122	
3	ブライダルフェアと広告宣伝の実際	123
	(1) ブライダルフェアの意義と機能 123	
	(2) ブライダルフェア来場者の行動変容 124	
	(3) ブライダルフェア企画・運営のプロセス 124	
	(4) 広告宣伝の種類と媒体特性 125 (5) 広告予算の設定方法 125	
4	テクノロジーとデジタルマーケティングの活用	126
	(1) デジタルマーケティングの四層構造 126	
	(2) DX・AIの活用と次世代フェアの可能性 126	
5	新規市場と拡大要因	127
	(1) なぜ新規市場の開拓が必要か 127	
	(2) セカンドウェディング市場：再婚という新たなブライダル需要 127	
	(3) 新規市場開拓に向けた商品・サービス開発の方向性 128	
6	まとめ	129

終章 これからの結婚とブライダルの未来

1	多様化する家族と結婚	131
2	伝統と時代先行型の産業構造	131
3	ブライダルとデジタル化の融合	131
4	未来のブライダル	132
5	結びにかえて	132
	さくいん	133





序章 ブライダルとは何か

ブライダルとは単に「結婚式」を指す言葉ではなく、結婚という社会制度、家族構造の変化、文化的な儀式、さらには産業としての広がりを含む総合的な概念である。本章では、ブライダルの範囲とその背景にある結婚制度や社会的意味を整理し、本書が扱うブライダルの学術的・実務的枠組みを提示する。ブライダルを理解することは、結婚文化の成り立ちを知るだけでなく、人間社会の価値観や歴史の変容を読み解くための重要な基盤となる。

また、本章は本書の見取り図でもある。第1章以降で扱う家族論、結婚の歴史、宗教と婚礼、産業構造、サービス実務といった多様なテーマを、1つの体系として理解するための土台を、ここでいねいに築いておきたい。

1 結婚の社会的意味

結婚は個人同士の結びつきであると同時に、社会制度としての側面をもつ。歴史的にみると、結婚は単なる恋愛の結果ではなく、財産の継承、家族関係の維持、労働力の確保、さらには政治的・社会的同盟の形成など、多様な役割を担ってきた。

日本においても、かつて結婚は「家」と「家」を結びつける制度として位置づけられ、個人の意思よりも家族や社会の意向が重視される傾向が強かった。明治民法に定められた「家制度」のもとでは、戸主の同意なくして結婚は成立し得ず、結婚は家の存続と財産の継承を担う公的行為として制度化されていた。戦後の民法改正により家制度は解体され、結婚は個人の意思に基づく契約へと姿を変えたが、それでもなお家族や社会との関係性の中で成立する社会的行為であることに変わりはない。結納や両家顔合わせ、披露宴における親族紹介といった現代の慣行には、「家」と「家」の結びつきという観念がなお息づいているといえる。

また、結婚は人生儀礼（通過儀礼）の1つとして重要な意味をもつ。誕生・成人・結婚・死といった節目に行われる儀礼の中で、結婚は新たな家族の成立を社会に示し、周囲から承認を得る行為である。文化人類学者ファン・ヘネップが論じたように、人生儀礼は「分離・過渡・統合」という三段階の構造をもち、結婚式もまた、二人がそれまでの所属から離れ、新たな関係の中へと統合されていく過程を象徴的に演出する場である。このように結婚は、個人のライフイベントであると同時に、社会的秩序や価値観を維持・再生産する役割を担っている。





2 ブライダルの定義と語源

「ブライダル (bridal)」という言葉は、英語の bride (花嫁) に由来し、本来は「花嫁に関する」「結婚に関する」という意味をもつ形容詞である。そこから転じて、現代では結婚式や婚礼にかかわる事象全体を指す言葉として用いられるようになった。しかし今日のブライダルは、単なる挙式や披露宴にとどまらない。衣装、装飾、美容、写真、演出、旅行など、多様な要素が統合された複合的な領域であり、文化と経済が交差する分野でもある。

ブライダルは文化的側面も強くもつ。宗教儀礼としての結婚式、地域ごとの慣習、衣装や装飾に込められた象徴的意味などは、いずれもその社会の価値観や歴史を反映している。白無垢や色打掛^{むく いろうちかけ}、ウェディングドレスのベールやブーケに込められた花言葉に至るまで、婚礼を彩るあらゆる要素は長い時間をかけ育まれてきた文化的記号体系の一部なのである。

このようにブライダルは、「儀式」「文化」「社会制度」「産業」が重なり合う領域として理解する必要がある。

3 本書が扱う 3 つの領域

本書では、ブライダルを多角的に理解するために 3 つの領域から考察する。これらは独立したテーマではなく、相互に関連しながらブライダルという営みの全体像を形成している。

まず、第 1 章「日本の結婚と家族関係」では、3 つの領域の土台となる家族の変遷を追う。それは、結婚という営みがつねに「家族」という社会の単位の中で意味をもち、機能してきたからである。家族のあり方が変われば、結婚の意味も、婚礼の形式も、それらを支える社会のしくみも変わる。家族とはどのような役割を担ってきたのか、生産・労働、養育・教育、扶助、再生産、精神的支えといった機能がどのように移り変わってきたのか——明治期の「家制度」から戦後の民法改正による家制度の解体、高度経済成長期の核家族化、女性の社会進出、そして現代の多様な家族のかたちへと至る歴史の変遷を、まずは第 1 章でていねいに整理する。この家族の変遷こそが、結婚という営みを読み解くための土台となる。

ブライダルという営みを読み解くための土台となる「家族の変遷」の上に、本書は以下の 3 つの領域を立ち上げていく。

(1) 歴史・文化としてのブライダル

結婚は、各時代の社会構造や宗教観、価値観を反映しながら変化してきた。日本の結婚においても、武家礼法に基づくものから神前式の成立、戦後の結婚式場の発展を経て、現代の多様な結婚式スタイルへと変化している。

また結婚は文化の結晶でもある。慣習や装い、儀礼の一つひとつには、その社会が大切にしてきた価値観と祈りが息づいている。家族のあり方が時代とともに変わってきたように、これらの結婚文化もまた、長い時間をかけて受け継がれ、組み替えられながら、今日の姿を

かたちづくっている。歴史的変遷の理解は、現代の結婚の意味をとらえる上で不可欠である。

(2) 日本の結婚状況と家族の変化

結婚は社会の変化と密接に関係している。第1章で整理する家族の変遷を踏まえた上で、本書では現代社会における結婚の位置づけを考える。未婚化・晩婚化・非婚化、少子化、女性のキャリア形成、ジェンダー観の変容——こうした現象はいずれも、家族の機能と構造が変化したことの帰結であり、また結婚という制度の意味を問い直す動きでもある。

家族が、生産や労働の単位から、愛情や精神的支えを中心とする情緒的な共同体へとその重心を移してきたことは、結婚の意味そのものを大きく変えてきた。結婚を社会の側面から学ぶことは、現代社会の現在地を理解し、その行方を考えることに直結している。

(3) ブライダル産業としての側面

現代の結婚式は、専門の施設やサービスによって支えられる産業として発展している。結婚式場、ホテル、レストラン、衣装業、美容、写真・映像、装花、引出物、ギフト、旅行業、ジュエリー、印刷物、ITプラットフォームなど、実に多くの業種がかかわることで、ブライダルは一大産業をかたちづくっている。日本のブライダル市場は数兆円規模に達するとされ、関連する裾野産業まで含めれば、その経済的影響は計り知れない。

またこの産業のあり方も、家族と結婚の変容と無関係ではない。核家族化や個人化の進展が披露宴の小規模化を生み、価値観の多様化がリゾートウェディングやフォトウェディング(結婚衣装での写真撮影主体のカジュアルスタイル)、ナシ婚(婚姻届のみを提出し、結婚式や関連行事を一切行わないスタイル)といった多彩な選択肢を生み出してきた。産業を学ぶこともまた、家族と社会の変化を映す鏡として結婚をみつめる作業にほかならない。

4 本書を貫く学びの視座

結婚という営みを学ぶことは、単に結婚や婚礼に関する知識を得ることにとどまらない。そこには、人間社会の価値観、文化、宗教、家族、そして歴史の変遷が凝縮されている。結婚という普遍的な営みは、人がどのように他者と結びつき、家族や共同体を築き、世代をつないできたのかという、人間社会の根源的な問いに直結している。本書が一貫して大切にしたいのは、まさにこの問いを通して人間と社会のあり方をみつめる視座である。

ここまでみてきたように、結婚は文化的な厚み、社会的な広がり、そして産業としての裾野を併せもつ営みである。本書はこの3領域を行き来しながら、結婚を入口として、文化・社会・歴史を多角的に学べる教材として編まれている。したがって本書は、特定の業界にかかわる者だけを想定したものではなく、結婚や家族、社会のあり方に関心を寄せるすべての読者に開かれている。

ブライダル産業という視点では、結婚は実務的な側面をもつ分野でもある。多様化する結婚観やライフスタイルに対応するためには、歴史的知識と文化的理解、さらには実務的な対応力が求められる。本書は、これらを総合的に学ぶための基礎を提供するものである。



日本の結婚と家族関係

第1章



1 家族とは何か－その役割と機能

結婚は個人どうしの関係であると同時に、社会の制度や文化と深く結びついた社会的現象である。とりわけ日本では、結婚は古来より「家」という単位と密接に結びついており、家族制度の変化は結婚のあり方にも大きな影響を与えてきた。本章では、日本社会における家族制度の歴史的変遷をたどりながら、結婚の意味がどのように変化してきたのかを考えていく。

まず、家族とはどのような役割をもつ社会集団なのだろうか。家族の形態は時代・地域・文化によって多種多様であり、1つの固定した定義でとらえることは困難である。家族は、人間が社会生活を営む上で最も基本的な集団の1つであり、社会の基礎単位として重要な機能を担っている。

「厚生白書（平成8年版）」（厚生省，1996）では、家族の役割としていくつかの機能が指摘されている。家族が果たす最も根本的な役割は、生活保持機能である。すなわち、家族は構成員の生活を維持し、保障するという基本的な機能を担っている。

この生活保持機能を実現するために、家族はさらにいくつかの具体的な機能を発揮する。

（1）生産・労働機能

構成員の生活を維持するためには、生活に必要な資源や収入を確保しなければならない。そのために家族の構成員は生産活動や労働に従事する。これを生産・労働機能という。農業社会では家族全員が農作業に携わる「生産共同体」として機能しており、現代では主に賃金労働を通じて生計を立てることでこの機能が引き継がれている。

（2）養育・教育機能

家族は子どもを生み育て、教育するという役割を担う。これを養育・教育機能という。食事や衣服・住居といった物質的なケアを提供するだけでなく、言葉・生活習

慣・社会的な規範を教え込み、子どもを社会の一員として育て上げることが、この機能の中心にある。

（３）扶助機能

構成員が病気になったり、年老いて働けなくなり、介護を必要とする状態になった場合、家族は互いに助け合う。この役割を扶助機能という。家族は、人が最も脆弱な状況に置かれたとき（病・障害・老齢など）に最初に支えを差し伸べる、社会的なセーフティネットとして機能してきた。

（４）再生産機能

生産・労働機能、養育・教育機能、扶助機能という家族の営みを通じて、次の世代を担う人間が育まれる。これを再生産機能という。再生産機能によって社会の人口が維持・更新され、社会全体の存続が可能となる。つまり家族の機能は、個々の家庭内にとどまらず、社会の持続可能性そのものを支えるものでもある。

（５）精神的機能－豊かな社会で重みを増す役割

家族にはさらに、愛情や精神的安らぎの場としての精神的機能がある。家族の中で交わされる愛情・共感・安心感は、構成員の心理的な安定を支える基盤となる。生活水準が向上し豊かになった社会では、生活保持機能よりもこの精神的機能が重視される傾向が強まってきた。

これらの機能を念頭に置くことで、なぜ結婚・家族のあり方が社会の変化とともに大きく変容するのかを理解するための視点が生まれる。家族に求められる機能が変わるとき、結婚の意味もまた変わるからである。

2 明治期の家制度 －「家」を基盤とした社会のしくみ

日本の家族制度を理解する上で重要なのが、明治時代に形成された「家制度」である。明治政府は近代国家を形成する過程で戸籍制度を整備し、1898年（明治31年）に施行された民法では「家」を社会の基本単位として位置づけた。この制度のもとでは、家族は「家」に属する成員として扱われ、その中心には家長である戸主が置かれていた。

家制度の特徴は、家父長制にあり、戸主は家族の代表者であり、家の財産管理や家族の身分関係に関する重要な決定権をもっていた。家族員の居所を決める権限、家族の入籍・除籍への同意権、そして子の結婚への同意権が含まれた。すなわち、子ども

